

【論考】 2024年11月27日掲載

## 2 種類の威力偵察

総合企画部 2等陸佐 樋口俊作

はじめに

本稿は、理念型としての威力偵察を考察するものである。ここでいう威力偵察とは、戦闘を行うことで敵に関する情報を収集する行為のことである<sup>1</sup>。考察する対象は陸上における戦闘で、師団や旅団の隷下地上部隊が行うものを想定している（より具体的に言えば、陸上自衛隊の偵察戦闘部隊や師・旅団主力に先遣される普通科連隊等が行うものを想定している）。

本稿では、まず第1節で威力偵察を研究する必要性を、第2節で引き続き研究の必要性と威力偵察の種類を考察する。後述する理由により、従来の陸上自衛隊における威力偵察は、他の情報収集手段に比べて重要ではなかった。筆者の主張は、今後の陸上自衛隊は威力偵察を重視していく必要があるということ、そして、威力偵察には2つの種類が存在し得るのではないかということである。

続いて、第3節で事例の紹介を行う。本稿で検討する威力偵察はあくまで理念型であり、やや極端な考え方や表現をしている。よって、威力偵察を本稿で検討したとおりに遂行すべきだと主張するわけではない。その一方で、本稿で検討した内容が単なる机上の空論ではないということを事例を通じて明らかにしておけば、陸上自衛隊なりの方法で新たな威力偵察を具体化できるようになることが期待できる。

### 1. 威力偵察の研究の必要性

なぜ、いま、威力偵察を考察する必要があるのか。そこには、3つの理由がある。本節では2つの理由を述べる。3つ目の理由は、次節で2種類の威力偵察について述べた後に改めて言及する。

#### (1) 理由1 陸上自衛隊偵察部隊の編制・装備の変化

---

<sup>1</sup> 陸上自衛隊の威力偵察の定義は、公開資料上で確認できなかった。本文で使用している定義は陸上自衛隊で採用しているものと異なっており、あくまで本稿における定義である。

1つ目の理由は、陸上自衛隊の偵察部隊の編制・装備が変化していることである。陸上自衛隊の従来の偵察部隊では、編制・装備上、威力偵察は主要な手段になり得なかった。他方、近年は編成・装備の変化により、威力偵察も十分可能な選択肢になってきた。

具体的に見てみよう。陸上自衛隊の従来の偵察部隊は、しばしば忍者と形容されてきた。その理由は、従来の偵察部隊が行っていた偵察手段にある。ある程度の重装備を有する第7偵察隊を除いて、一般的な偵察部隊の戦闘力は限定的であり、情報収集を行う場合は敵から身を隠すことが多かった。このように敵と交戦せず、身を隠しながら行う偵察を、本稿では隠密偵察と呼ぶことにする。従来の偵察部隊では威力偵察は不可能でないとしても、主要な選択肢ではなく、隠密偵察が主な情報収集手段であった。

他方、近年は陸上自衛隊に続々偵察戦闘大隊が編成されている。偵察戦闘大隊は、従来の偵察部隊に加え、機動戦闘車部隊を有する部隊である。偵察戦闘大隊が編成されたことにより、威力偵察は現実的な選択肢になってきたのである。

## (2) 理由2 新たな撃破メカニズムに関する検討

2つ目の理由は、教育訓練研究本部の研究成果である「陸上自衛隊 2040」に新たな撃破メカニズムが盛り込まれていることである（筆者はこの研究に関与していない）<sup>2</sup>。今後の研究次第で、新たな撃破メカニズムは陸上自衛隊の戦い方へ反映されていくことになるだろう。

米陸軍の定義によれば、撃破メカニズムとは「敵の妨害がある中で、友軍がその任務を遂行する方法（method）<sup>3</sup>」のことである。「陸上自衛隊 2040」には、撃破メカニズムが新旧合わせて4種類記載されている<sup>4</sup>。ただし、本稿では撃破メカニズムそのものは扱わない<sup>5</sup>。

撃破メカニズムが複数ある背景には、「物事の見方」が複数あることが関係していると考えられる。ここでいう「物事の見方」とは、物事を解釈する方法のことである。

「物事の見方」と、情報やその収集要領の関係について考えてみよう。日常生活の感覚で言えば、まず五感を通じて情報を得て、その後に「物事の見方」に応じて情報が解釈される。しかし、「物事の見方」が変われば、求められる情報やその収集要領も変化することがある。

例えば、芸術の視点で花を見ようとすれば、必要な情報は色や形であり、その情報は花自体の観察により収集されることになるだろう。他方、経済の視点で花を見ようとすれば、必

---

<sup>2</sup> 教育訓練研究本部「陸上自衛隊 2040」教育訓練研究本部 HP（2024年9月18日）  
<https://www.mod.go.jp/gsdf/tercom/riku2040.html>（参照 2024年9月26日）9頁。

<sup>3</sup> Headquarters, Department of the Army, *ADP 3-0 OPERATIONS* (2019), p. 2-4.

<sup>4</sup> 教育訓練研究本部「陸上自衛隊 2040」、9頁。

<sup>5</sup> 教育訓練研究本部が研究した撃破メカニズムに関する具体的な説明は、他の職員の記事等を参照のこと。菊池裕紀「陸上自衛隊長期防衛見積りの研究における新たな取り組み」教育訓練研究本部 HP（2024年2月2日）  
<https://www.mod.go.jp/gsdf/tercom/img/file2453.pdf>（参照 2024-9-26）2-3頁；尾崎安奈「時空戦 一時間の「早さ」を勝ち目とした機動戦の新たな戦い方」教育訓練研究本部 HP（2023年4月21日）  
[www.mod.go.jp/gsdf/tercom/research.html#spb-page-title-1](http://www.mod.go.jp/gsdf/tercom/research.html#spb-page-title-1)（参照 2024-5-22）。

要な情報は価格であり、その情報は値札を見たり店員に聞いたりインターネットで検索したりして収集されることになる。

このように、「物事の見方」の違いによって求められる情報やその収集手段も変化する。両者の関係は一方向ではなく、双方向である。

偵察とは情報収集の方法の1つである。陸上自衛隊が「物事の見方」を変えようとするのであれば、従来と異なる偵察方法も併せて検討しなければならないだろう。

## 2. 「物事の見方」と威力偵察

### (1) 2種類の「物事の見方」

教育訓練研究本部が検討中の撃破メカニズムの背景にある「物事の見方」は、大別して2種類あるように見える。1つは要素還元主義と呼ばれるものであり、もう1つは全体論と呼ばれるものである。それぞれの「物事の見方」を考えてみよう。

まずは要素還元主義を見てみよう。こちらは、全体は部分の総和であるという見方である。全体を個別の部分に分解することができるし、分解した部分をまとめることで全体を再構成できる。この見方下では、部分の理解を蓄積することで、全体を理解することができることになる。

次に全体論を見てみよう。こちらは、全体は部分の総和以上であるという見方である。全体を部分に分解すると、全体の性質が失われる。逆に、個別の部分をもとめて全体を作ると、部分には見られない性質が生まれる。部分に無い性質が全体に生み出されるのは、部分同士がつながっているからである。部分単体と、全体の中の部分では性質が異なる。この見方下では、部分の理解を蓄積するだけでは全体を理解することができない。部分を見る視点に加えて、全体を俯瞰する視点や部分同士のつながりを見る視点が必要になる。ちなみに、教育訓練研究本部が検討中の新たな撃破メカニズムの背景にある見方は、全体論の方である。

では、これらの見方を部隊に当てはめてみよう。要素還元主義では、例えば「5人の将兵」と「5人の将兵から成る部隊」に差はない。部隊を知りたいければ、個々の将兵に関する情報を収集すればよい。他方、全体論では両者は異なることになる。個々の将兵に関する情報が必要であることは変わらないものの、部隊全体や将兵同士の関係性等についても情報を収集する必要がある。この見方の違いを表したものが図1である。

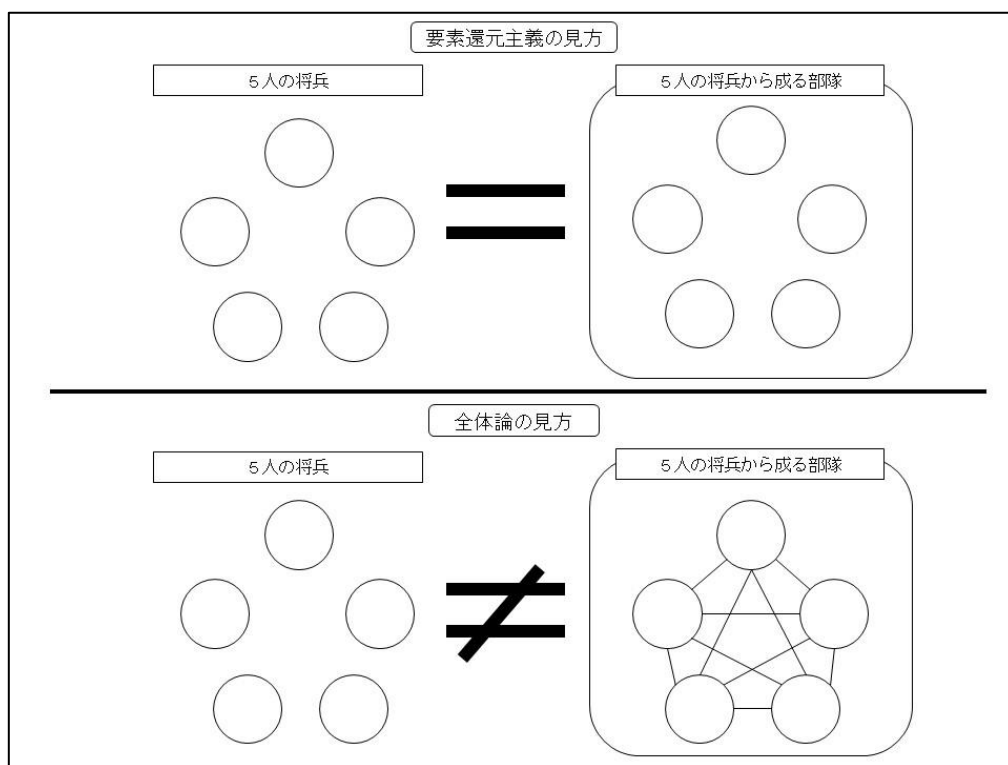


図1 要素還元主義の見方と全体論の見方（一般論）

（出所）筆者作成

## （2）戦場と「物事の見方」

ここからが筆者の問題意識となる点である。戦場は、彼我の部隊が直接干渉を交える場所である。要素還元主義の見方であれば、敵部隊が単体で戦場の外側にいても、戦場内で我が部隊と交戦していても、その性質は変わらない。したがって、基本的にどのタイミングであれ、敵部隊を偵察すれば必要な情報を得ることができる。もっとも、どのタイミングでも良いとは言っても、一般的に情報は新しいほど価値が高いため、任意の時点から継続的に敵を偵察することになるだろう。

では、全体論の見方の場合はどうであろうか。戦場では、彼我の部隊の間でなにかしらのやり取りが生起している。つまり、戦場では彼我の部隊の間につながりが生まれている。勿論、そのつながりは部隊内部に存在するつながりとは別の種類のものであろう。それでも、つながりが生起していることは確かである。

そうすると、全体論の見方では、「単独で存在する敵部隊」と「我が部隊と交戦する敵部隊」は異なる性質を有することになる（図2参照）。そして、これら2つの部隊に関する情報のうち、敵を撃破するために一層必要とされる情報は、「我が部隊と交戦する敵部隊」の

情報のはずである。問題は、「我が部隊と交戦する敵部隊」は、実際に彼我部隊が交戦を開始しなければ存在できないということである。戦闘前に行われる偵察では、「我が部隊と交戦する敵部隊」に関する情報を入手できない。

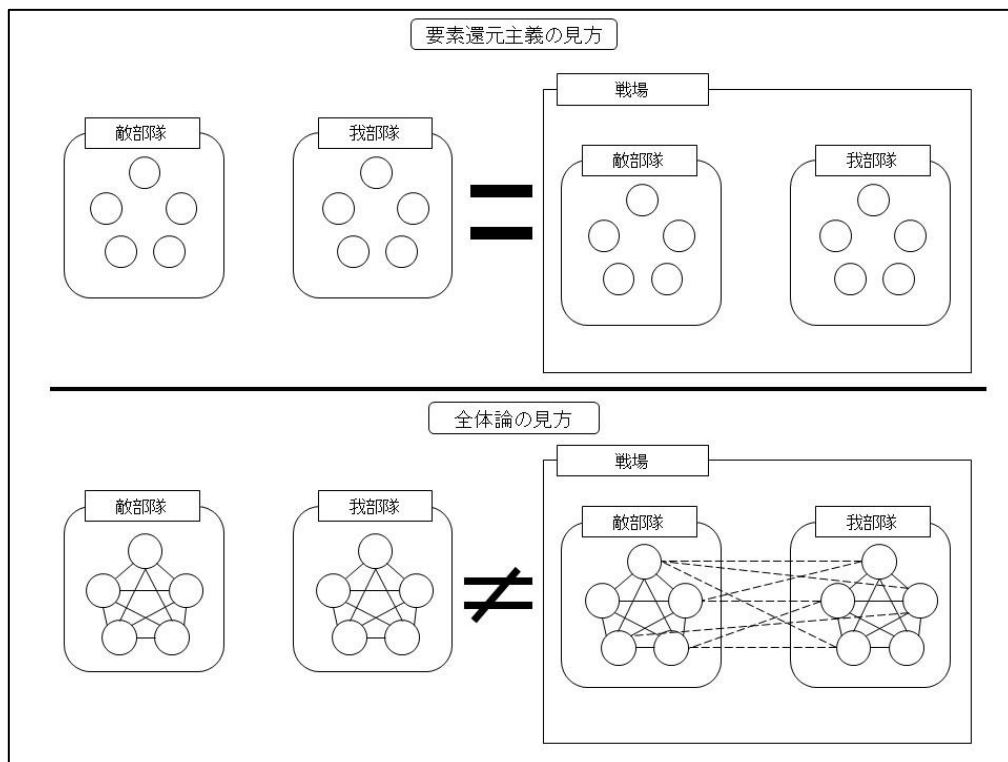


図2 要素還元主義の見方と全体論の見方（戦場）

（出所）筆者作成

### （3）2種類の威力偵察

では、2つの「物事の見方」を踏まえながら、それぞれの見方における威力偵察の様相を考えてみよう。なお、本稿で扱う偵察は主力部隊（上級部隊）のために行うものなので、主力部隊の戦い方にも触れる。

要素還元主義の見方では、「単独で存在する敵部隊」と「我が部隊と交戦する敵部隊」は性質に違いはない。交戦の有無によって敵の性質が変化するわけではないため、隠密偵察で間に合うのであれば、威力偵察は必須ではない。

また、戦闘を行わなくても必要な情報を入手できるという前提に立てば、戦闘に先立って詳細な情報を入手し、綿密な計画を立案し、敵を効率的に撃破しようとするのは妥当だろ

う。このため、主力部隊の戦闘は計画重視で行われることになる。そして、偵察部隊が行う当初の偵察は、主力部隊の戦闘計画作成に資することを目的に行われることになる。

なお、主力部隊による戦闘中にも情報収集は必要であるため、主力部隊の交戦の前に行われる偵察はできるだけ被害が少なくなるように行われる必要がある。よって、威力偵察が行われるとしても、その規模は限定的なものになるだろう。

一方、全体論の見方では、「我が部隊と交戦する敵部隊」を生み出さなければ必要な情報収集を行うことができない。「我が部隊と交戦する敵部隊」を生み出すためには、十分な戦闘力を有した部隊によって行われる威力偵察が必要となる。この場合の情報収集は隠密偵察のみでは遂行できないし、軽易な戦闘でも遂行できない。威力偵察は必須であり、しかも、その威力偵察では本格的な戦闘が求められる。

彼我の交戦が行われれば、彼我の部隊に何かしらの損害が生起したり、経験をもとに編成や戦い方の修正が図られたりするため、それぞれの部隊の性質は多少なりとも変化する。すると、次に交戦が生起するときの彼我の部隊は、前回交戦時の彼我部隊とは異なることになる。「我が部隊と交戦する敵部隊」の情報は、まさに戦闘を行っているその時点においてのみ有効なものとなる。

この情報を活用するためには、威力偵察から途切れることなく、主力部隊による戦闘が開始される必要がある。主力部隊には、一旦仕切りなおして戦闘計画を作成している時間はない。主力部隊は、威力偵察が行われている間にその時点の敵の性質を見極め、戦闘加入しなければならない。威力偵察と主力部隊の戦闘は時間的に一連で行われるため、表面上、威力偵察は主力部隊の戦闘の一部に組み込まれることになる。

ここまで検討した2種類の威力偵察をまとめると、表1のとおりである。

表1 2種類の威力偵察

要素還元主義における威力偵察	種類	全体論における威力偵察
必須ではない	威力偵察の必要性	必須
主力部隊の戦闘計画作成に資する	目的	「我が部隊と交戦する敵部隊」の現出
小規模・限定的	戦闘の程度	本格的な戦闘
主力部隊の戦闘とは別	主力部隊の戦闘との関係	主力部隊の戦闘の一部
(全体論に比して) 長期的	獲得した情報が有効な時間的範囲	短期的・その場限り

(出所) 筆者作成

#### (4) いま威力偵察を考察しなければならない理由 3

ここまでの考察を踏まえることで、いま威力偵察を考察しなければならない第 3 の理由を述べることができる。

陸上自衛隊は教範『野外令』に「戦いの原則」という 9 項目の原則を採用しており<sup>6</sup>、「古今幾多の戦史・戦例から帰納された戦勝獲得の基本的な原則であり、必然性と普遍性をもつ経験的理法則<sup>7</sup>」という説明を与えている。時代を超えた様々な戦いの勝敗が、わずか 9 項目の理法則に支配されていると唱えている『野外令』の考え方は、全体を分解することで対象を理解しようとする要素還元主義と親和性が高いように筆者には思われる<sup>8</sup>。

これまで見てきたように、要素還元主義では威力偵察は必須ではない。陸上自衛隊の偵察部隊が隠密偵察を中心に活動してきたことは、従来はあまり問題にはならなかった。しかし、今後、陸上自衛隊が全体論の見方を積極的に取り入れていくのであれば、威力偵察の研究も併せて必要になると筆者は考える。

#### (5) 補論 双方の視点から互いの情報収集と戦い方を見てみる

補足として、要素還元主義と全体論のそれぞれから見た場合、互いの情報収集と主力部隊の戦闘がどのように映るかを考えてみよう。

まずは、要素還元主義から全体論を見た場合である。この場合、事前の情報収集にあまり関心がないように見えるだろう。そして、十分な情報収集を行わないまま、無計画に主力部隊の戦闘が開始され、しかも主力部隊は戦力の逐次投入を行っているように見えるだろう。情報を軽視し、行き当たりばつりに行動する部隊が敗北するのは当然であり、仮に勝利できたとすれば、その場その場の小さな偶然が積み重なったようにしか見えないだろう。

次に、全体論から要素還元主義を見た場合である。この場合、敵の全体像には関心を持たず、その一側面にのみに対してほとんどの情報収集努力を傾けた上、敵に関する中途半端な理解に基づいて立案された計画に従って主力部隊が戦闘を行うように見えるだろう。そもそも一面的な理解のみで計画を立案しようとする事自体が驚きである。勝手な思い込みに近いような計画に従って行動する自己中心的で硬直した部隊が敗北するのは当然であり、勝利できたとすれば事前の計画がたまたま状況に適合したようにしか見えないだろう。

このように、「物事の見方」を変えると、戦い方の正当さと不条理さが逆転することがあ

---

<sup>6</sup> 陸上幕僚監部『野外令第 1 部』（1968 年）国立国会図書館デジタルコレクション  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2527259> (参照 2024-5-22) 写真 5-6 枚目。

<sup>7</sup> 陸上自衛隊幹部学校『野外令第 1 部の解説』（1968 年）国立国会図書館デジタルコレクション  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2527260> (参照 2024-5-22) 15 頁。

<sup>8</sup> 付言すると、筆者は「戦いの原則」を採用しているあらゆる軍隊等の教範・ドクトリンが要素還元主義的な見方をしていると考えているわけではない。あくまで「戦いの原則」に「必然性と普遍性をもつ経験的理法則」という説明を与えている『野外令』に限定した見解である。

る。陸上自衛隊が「物事の見方」を変えるのであれば、これまで不条理で参考にならないと考えられてきた戦史や戦例の中にも、貴重な教訓を得られるものが出てくるかもしれない。

### 3. 事例の紹介

ここまで理念型としての威力偵察を考察してきた。次に、検討した理念系に近い偵察の考え方や戦い方（特に全体論の方）を実際に採用した軍があることを紹介する。

紹介するのはいずれも古い事例ばかりであり、威力偵察という言葉は使用されていない。しかし、次の点に着目すれば、本稿の検討が全くの空論ではないことの例証になるであろう。すなわち、戦闘を経なければ必要な情報は得られないと考えている軍があること、そして、事前の計画を重視せず戦闘中に獲得した情報に応じてその後の戦い方を柔軟に変化させようとする軍があることである。

#### （1）旧ソビエト連邦軍

最初に紹介するのは旧ソビエト連邦軍である。筆者は、全体論的な情報収集を具現化した一例だと考えている。それでは、1936年版『赤軍野外教令』を見てみよう。日本陸軍が翻訳した資料が存在しているものの、筆者のアクセスの都合上、田村尚也『各国陸軍の教範を読む』を参照した。

まず、搜索の部分を見てみよう。「搜索」とは現代でいう「偵察」のことと考えて差し支えない<sup>9</sup>。『赤軍野外教令』からの引用として、「戦闘を以てする搜索及地上搜索は、敵状に関し完全にして最も信頼するに足る情報を齎らす<sup>10</sup>」とある。戦闘を通じて得た情報が最も信頼性が高いとされているのである。次に、田村の解説として「少なくとも昼間の近距離搜索においては、ソ連軍では一般的な意味での搜索行動は行われなことになる。搜索隊は一般部隊と同じように戦闘し、それを幹部が視察するのである<sup>11</sup>」とある。また、求められている搜索隊の戦闘は、敵に軽く攻撃を仕掛けて敵の出方を見るようなものではないという<sup>12</sup>。搜索隊による本格的な戦闘の重視、そして、幹部による戦闘全体の俯瞰の必要性は、全体論的な情報収集の特徴として解釈が可能である。

次に主力部隊の攻撃要領を見てみよう。ソ連軍の攻撃方法は梯団攻撃として知られる。『赤軍野外教令』では、連隊内を2ないし3の梯団に区分し、攻撃方向に沿って縦に配列する。そして、まず第1梯団が攻撃を行い、その経過に応じて第2梯団が戦闘加入する。

<sup>9</sup> 厳密には、日本陸軍では時期によって搜索と偵察が使い分けられていたこともある。本稿の考察の範囲では両者を区別する必要はない。

<sup>10</sup> 田村尚也『各国陸軍の教範を読む』（イカロス出版、2015年）122頁。ルビも出典のとおり。

<sup>11</sup> 127頁。

<sup>12</sup> 124頁。



攻撃要領の特徴は「第二線は、何等新たなる指示又は命令を待つこと無く、独断を以て第一線部隊の戦果を拡張し且第一線を支援するものとす<sup>13</sup>」とされている点にある。第二線（第2梯団）の戦い方は第二線指揮官の独断で変更でき、その判断は第一線（第1梯団）の戦況を観察することによって行われる。つまり、第一線は主力部隊の一部として戦闘を行っていると同時に、第二線にとっての威力偵察を行っていることになる。

比較の参考として、1968年版『野外令』（陸上自衛隊）の攻撃要領を見てみよう。すでに述べたとおり、筆者は『野外令』は要素還元主義的な視点で記述されていると考えている。同書には、「(主攻の) 攻撃衝力は、最終目標の奪取まで持続することが必要である<sup>14</sup>」、「主攻の転換は、その影響するところを慎重に検討しなければならない<sup>15</sup>」とある。教範の記述から読み解く限りにおいて、陸上自衛隊では攻撃方向は戦闘開始前に決まっておき、それを戦闘中に変更することに慎重である。陸上自衛隊と比較すると、ソ連軍では戦闘中の攻撃方向の変更が下級指揮官の独断で柔軟に行われることが分かる。

## （2）米海兵隊

次に紹介するのは米海兵隊である。米海兵隊には“command push”と“reconnaissance-pull”という考え方がある。両者は偵察部隊の運用要領や情報収集要領と、主力部隊の戦闘要領の関係を表している。本稿ではそれぞれ「指揮官主導型」と「偵察主導型」と呼ぶことにしよう。指揮官主導型が要素還元主義のものに近く、偵察主導型が全体論のものに近い。そして、海兵隊で重視されているのは後者の方である。

それでは、海兵隊の戦い方の参考書である“*Maneuver Warfare Handbook*”を参照して、両者を比較してみよう<sup>16</sup>。同書では、攻撃の場面を例にとって説明されている。

指揮官主導型の戦い方では、部隊が前進する方向は作戦が開始される前に決まっておき、滅多に変更されないという。偵察部隊は予定された前進方向に合わせて、縦深に配置される。つまり、偵察は、指揮官が事前に立案した戦闘計画に基づき、計画遂行に必要な情報を収集するように行われる。そして、戦闘開始前に立案された計画に従って主力部隊の戦闘が行われる。

一方、偵察主導型の戦い方では、主力部隊の前進方向は偵察の結果に応じて変更されるという。偵察主導型では、偵察幕が用いられる。幕という表現から分かるとおり、部隊は横広に展開して前進する。そして、敵を広く偵察して、発見された敵配備の隙間や弱点から敵の後方へ前進していく。偵察部隊に限らず、自分より前方に所在する全ての部隊は偵察幕の一部であるという。当然ながら、自分自身も後続部隊のための偵察幕の一部ということになる。

<sup>13</sup> 199頁。

<sup>14</sup> 陸上幕僚監部『野外令第1部』101頁。カッコ内は筆者による

<sup>15</sup> 同上。

<sup>16</sup> William S. Lind, *Maneuver Warfare Handbook* (Colorado: Westview Press, 1985), pp. 18-19. 訳は筆者による。

偵察主導型では事前に決められた計画ではなく、戦闘が開始された後、前方部隊の戦闘兼ねて情報収集の結果に応じて、後続部隊の攻撃方向が変化していくのである。本稿の趣旨に合わせて換言すれば、全ての部隊の戦闘は威力偵察なのである。

おわりに

敵の妨害の有無に関係なく、そもそもの性質として、戦闘に先立って入手できる情報と、戦闘を行うことによってしか入手できない情報があるのではないか。そして、後者のための威力偵察を研究していかなければならないのではないか。本稿における筆者の主張である。

(2024年9月脱稿)

<本稿は個人の見解であり、教育訓練研究本部を代表するものではありません。>